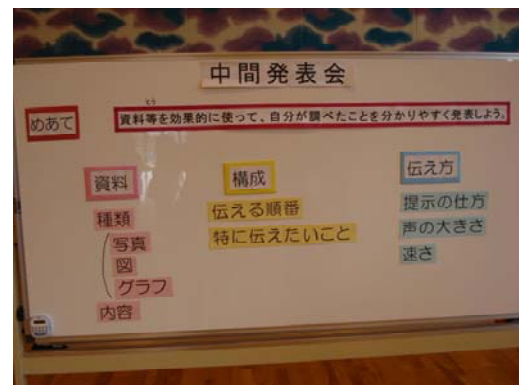


小田小学校



平成22年1月22日（金）公開授業Ⅱ 指導者T1津組 淳子 T2藤澤 園美

1 単元名 めざせ 国際人! ～もっと知りたい世界のこと～

2 単元の目標

- 外国の人とふれあったり、外国のくらしや文化について調べたりすることを通して、主体的に外国について追究していこうとする思いや願いをもつことができる。

(課題をもつ力)

- 外国のことについて本や資料、インターネット等の様々な方法を使って調べたり、追究の過程で生まれてくる疑問や課題を解決したりすることができる。

(追究する力)

- 外国のことを調べるために出会った様々な人々と、進んで交流をもつことができる。また、自分が調べた国の特徴について、より効果的な方法で伝えることができる。

(コミュニケーションする力)

- 自国の文化の良さに気付き、異文化を受け入れることにより、相手の立場を尊重しようとする気持ちを持ち、世界の仲間と共に生きていくことの大切さについて考えながら、よりよい生活をしようとするすることができる。

(生き方を考える力)

3 指導上の立場

(1) 単元について

国際化が急速に進展する中で、国際社会においてどう生きるかは、これからのわたしたちにとって重要な課題である。国際社会の一員として、国際関係や異文化を理解するだけでなく、異なる文化をもつ人々の生活・習慣・価値観を受容することが必要とされている。そして、「つながる」ことのできる態度・能力、そのために必要な自らの国の伝統文化に根ざした自己の確立、自らの考えや意見を発信し、国際人として具体的に行動できる態度・能力が求められている。

そこで、他国を理解するためには、まず自国の伝統文化を理解することが大切と考え、「ディスカバー日本～もっと知りたい日本のこと～」の学習では、地域の方に祭りの和太鼓の指導を受けたり、茶道の体験をしたりして、昔から伝わる日本文化に触れられるように計画した。

そして本単元では、その経験の上に立ち、外国の人と交流したり、いろいろな方法で世界の国々について調べたりする。その活動の中から児童が新しい発見をしたり、自分なりに日本文化と同じ点や違う点を見つけたりすることで児童の世界観を広げていきたい。

また、「つながる」をキーワードに、人や国とのつながりを意識し、異なる文化を有する人々に対して敬意を払い、理解し受容し、共に生きていく資質や能力を育てたいと考える。

(2) 研究主題との関連について

本校では、矢掛町の教育行政重点施策である「コミュニケーション能力の向上」を受



けて、研究を進めている。本単元では、自分の決めた国について調べたり、世界のために自分たちのできる活動に取り組んだりすることを通して、どの国の人とも仲良く助け合い、共に生きていくことのできる態度を養いたいと考える。

課題をもつ力を育成するために、まず身近な CIR（国際交流員）との交流を通して、世界に関心をもつことができるようにしたい。相手の国や文化を知るだけでなく、一緒にお茶会をして日本文化のよさを伝え、お互いの文化の交流を図りたい。そして、世界を身近に感じ、「もっといろいろな国について知りたい。」という意欲や課題作りにつなげたい。また、自分たちが調べたことや JICA の人の話から、児童に「自分たちにも、世界に対してできることはないか。」という課題意識をもつことができるようにしたい。

追究する力を育成するために、外国の文化・暮らしなどを調べる活動を取り入れた。ここでは、児童が関心をもちやすいスポーツの祭典・冬季オリンピックに目を向け、自分の応援する国を決めて、その国の衣・食・住や文化など 10 の観点から調べていく。本や資料・インターネットでの検索等を通して情報を収集したり、調べたことを整理・選択・分析し、発表資料を工夫したりすることで、情報活用能力も育てたい。

コミュニケーションする力の中で、本単元では特に表現する力の育成に重点をおき、自分たちが調べたことを児童朝会の学級発表の時間にポスターセッション形式で発表する活動を取り入れた。新聞、パンフレット、ポスター等の様々な表現方法を提示し、その中から効果的な方法を自分で選ぶことができるようにしたい。発表会前には、中間発表会を学級で行い、自分の発表方法が聞く人にうまく伝わったかを確認することができるようにしていく。また、国語科の「資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりすること」と関連付けて指導していきたい。

生き方を考える力を育成するために、「自分たちにも、世界に対してできることはないか。」という課題から、AMD A やボランティア貯金、フェアトレード商品、ユニセフについて調べていきたい。そして、自分たちにもできることとして、岡山に本部のある AMD A の募金活動等に取り組むことで、国際社会の中でよりよく生きていくことができる力をつけたいと考える。

本時は、自分たちが調べたことをみんなに伝えるための中間発表会である。資料を効果的に使い、自分の調べたことや思いを聞き手によりよく伝えることを目標にしている。このようにすれば聞き手にうまく伝わるだろうと考え、資料や発表の構成を工夫したつもりでも、自分が思ったほど伝わらないことがある。中間発表会をすることで、自分の発表のどこがうまく伝わったか、何がたりなかったかに気づき、本発表会に向けて発表の仕方や機器の操作にも慣れることができると思う。

聞き手は、自分の調べたことと比較しながら聞き、アドバイスや提案ができるようにしたい。お互いに発表した後、観点ごとに色分けした付箋紙を発表者が整理することで、自分の発表を見直すことができるようにする。発表はポスターセッション形式にし、できるだけ多くの発表を聞いてアドバイスできるようにしたい。授業の参観者にも参加していただき、児童が意見を参考にできるようにしたいと考えている。



4 本時案 (第2次 第14時)

目標	資料や機器等を効果的に使って、自分が調べたことを分かりやすく発表することができる。
学 習 活 動	教 師 の 支 援
1 本時のめあてをつかむ。	○本時は、発表会でみんなに分かりやすく伝えることができるように中間発表会をすることを確認する。
資料等を効果的に使って、自分が調べたことを分かりやすく発表しよう。(中間発表会)	
<p>2 中間発表会をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表する。 ・意見交換をする。 <p>3 本時の学習を振り返り、学習のまとめをする。</p> <p>4 次時の学習を知る。</p>	<p>○カードを提示し、発表のめあてや観点を確認して発表会に臨むことができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料・・・種類(写真, 図, グラフ等)・内容 ・構成・・・伝える順番・特に伝えたいこと ・伝え方・・・提示時間・提示の仕方・声の大きさ, 速さ等 <p>○ポスターセッション形式で発表者を1部・2部・3部に分け、聞き手は、移動してできるだけ多くの発表を聞くことができるようにする。</p> <p>○メッセージボードを用意し、聞き手が感想やアドバイスを資料・構成・伝え方の3つの観点から付箋紙に書いてはり、発表者の参考になるようにする。付箋紙は、ピンクが資料, 黄が構成, 青が伝え方の3色に色分けし、観点が意識できるようにする。また、よく調べているところや分かり易かったところは付箋紙に赤シールを、もう少し工夫した方がよいところは黄シールをはり、一目で自分の課題が分かるようにする。</p> <div data-bbox="925 1120 1453 1500" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> </div> <p>○各グループを回り、発表に行き詰っている児童に資料の提示の仕方等を助言する。</p> <p>○分かりやすい発表や詳しく調べたり、工夫したりしている児童を称揚する。</p> <p>○集まった付箋紙を各自の発表工夫カードに色別に整理してはり、自分の発表のよかった点やさらに工夫の必要な点を知ることができるようにする。</p> <p>○分かりやすく発表できていた点や次に生かす点をみんなに紹介し、どのような発表の仕方がみんなに分かりやすいかを共通理解できるようにする。</p> <p>○児童の発表や資料で工夫している点を称揚し、本発表への意欲につなげるようにする。</p> <p>○自分の課題を発表工夫カードに書くことで本時を振り返り、次時につなげるようにする。</p> <p>○次時は、本時の発表工夫カードを参考に発表資料や原稿を直したり、発表の仕方を工夫したりすることを伝える。</p>

- 1 単元名 場面の様子を想像しながら読もう
中心教材 「ごんぎつね」

2 単元の目標

- 登場人物の心の動きについて友達と話し合うことを通して、感じ方や考え方の違いに気づき自分の読みを見直したり深めたりすることができる。(関心・意欲・態度)
- 話したいことをはっきりさせて相手に伝わるように大きな声で話すとともに、相手を見て自分の考えと比べながら最後まで聞くことができる。(話すこと・聞くこと)
- 他の作品と読み比べて気が付いたことを、読み手に分かりやすいように、文の構成や表現を考えながら新聞に書くことができる。(書くこと)
- 登場人物の言動や情景描写を表す叙述を手がかりにして、登場人物の心の動きを想像しながら読み取ることができる。(読むこと)



3 指導上の立場

(1) 単元について

第3学年及び第4学年の「読むこと」領域における目標は、「目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。」ことである。これを受けて、本単元「場面の様子を想像しながら読もう」では、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと、さらに、新美南吉の他の作品や、心の通い合いをテーマにした作品を進んで読もうとする態度を育てることを主なねらいとしている。

「ごんぎつね」は、心の交流の美しさや悲しさを描いた文学教材である。ひとりぼっちの小ぎつねごんと兵十との心のすれ違いが美しい情景描写を背景に描き出され、児童の心に深く入り込むことのできる優れた作品である。そこで、場面ごとにごんと兵十の気持ちの変化をしみじみと味わうことができるように単元を構成した。児童はいたずらぎつねのごんに自分を重ねながら読み取っていくと思われるので、その思いを大切に、ごんの気持ちの変化の読み取りを重点的に扱うことにした。また、語り手を設定した物語の構成や余韻を残した結末の表現の工夫から、心を通い合わせることの難しさについても思いをめぐらせたいと考える。

「ごんぎつね」に感動した児童は、同一作者の作品「手ぶくろを買いに」に興味をもって読み進めていくと思われる。そこで、2つの作品の似ているところや異なるところに気をつけながら自分なりの読みを「きつね新聞」にまとめて発信する。新聞にまとめるにあたっては、読者を引きつけるような見出しを工夫したり、記事や挿絵の効果的な割り付けを考えたりして、相手に伝わるように仕上げていくことができるように支援する。そして、それを読み合う中で、一人一人の感じ方や考え方には似ているところや異なるところがあることに気付くとともに、それらを認めていこうとする態度を育てていきたい。

(2) 研究主題との関連について

矢掛町の教育行政重点施策である「コミュニケーション能力の向上」を受けて、本校では、国語科を通して「自分の考えを生き生きと伝え合う子どもの育成」を研究主題とし、研究を進めている。

中心教材「ごんぎつね」は、民話形式で語られ、昔の農村の生活を舞台に、日本の風習や登場人物の心の交流の美しさや悲しさを表現した作品である。この作品を読み味わうことは、日本文化のすばらしさを理解することにもつながると考える。

本校の中学年では、「自分の考えを進んで表現する子ども。友達どうし聞き合い、考えを認め合う子ども。」をめざしている。読むことの学習の中での伝え合いは、一人一人の確かな読み取

りを基盤とした上で成り立つものである。自分の読み、発見、気付きを周りの友達に伝えたいという強い思いが発表者には不可欠である。と同時に、聞く側には、友達の発表から新たな気付きが生まれたり、考えが深まったり変容したりするという喜びや期待感が必要である。そこで、全員が教材文と十分に向き合えるようにするために、学習の進め方のパターン化をはかると共に、音読の練習を重点的に繰り返す。また、伝え合いの場では、少人数で話し合い、考えを整理し、自信をもった上で全体へ発表していくようなプロセスをたどることが効果的であると考えた。その中で、励ましの言葉をかけたり、児童が話しやすい雰囲気をつくるように配慮したりして、進んで伝え合おうとする態度を育てたい。

本単元では、全員が教材文に主体的に関わり、自分の考えをもてるように、簡潔で明解な学習課題を投げかけると共に、根拠となる叙述に線を引き、自分の思いを書き込むための時間を確保する。交流の場では、電子黒板に提示した教材文にスタンプシールをはることで、友達がどの叙述を根拠に考えを進めているのかが一目で分かるようにする。そして、同じ叙述にスタンプシールをはった児童やハンドサインによる相互指名でどんどん思いを発表していく。その際、立ちどまらせたい叙述では教師からも問いかけたり、児童に聞き返したりして、全体の読みを深めていくようにする。また、適宜、ペア学習を取り入れ、自分の考えの根拠となる叙述を指し示しながら周りの児童と話し合うことによって、自分の考えを整理したり、相手の反応を確かめることによって自分の考えに自信をもったりすることができるように支援したい。場面を比べながら読み進めていくための手立てとして、毎時間学習した事柄を模造紙にまとめて壁面に掲示するようにする。これにより、場面ごとのごんの兵十に対する気持ちの変化や、ごんを「ぬすつとぎつね」と思い込んでいる兵十の気持ちを視覚的に捉えることができるようにする。また、「話す時・聞く時のポイント」を掲示して平素からよい話し方・聞き方を意識するように呼びかけるとともに、その指導と評価は単元を通して行うようにする。さらに、司書と連携して、同一作者の作品や心の通い合いをテーマとした図書を集め、子どもたちが一人一人の興味関心に応じて読むことができるように環境を整えていきたい。このことは、矢掛町の学力向上事業の一つである『読書環境の充実』につながっていくものと考えられる。

本時では、デジタル教科書を活用して、電子黒板に映し出された本文を見ながら全員で音読する。また、画面をスクロールさせることによって、ごんが兵十に向けたいたずら、後悔、償い、気付いてほしい思いなどを本文から想起できるようにする。さらに、「学習の足跡」を見ながら、ごんの気持ちの変化を視覚的にとらえ、ごんを撃った後の兵十の様子を叙述をもとに想像しながら、ごんと兵十の心の通い合いについて自分の考えをもち、話し合いながら考えを深めていけるように支援したい。



4 本時案（第2次 第7時）

目 標	ごんを撃ってしまった兵十の気持ちを話し合うことを通して、二人の心の通い合いを読み取ることができる。	
学 習 活 動	教 師 の 支 援	
1 本時のめあてをつかむ。	○ 前時の学習を振り返り、「ごんの気持ちがどのくらい兵十に通じたのだろうか。」と投げかけ、本時はごんを撃ってしまった兵十の気持ちを読み取っていくことを確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ごんをうってしまった兵十の気持ちを読み取ろう。 </div>		
2 めあてについて自分の考えをもつ。	○ まず、ごんを撃ってしまった兵十の気持ちについて、自分の考えをワークシートに書き、次に、根拠となる叙述に赤色でサイドラインを引いて、自分の考えを書き込んでいくように指示する。	
3 ごんを撃ってしまった兵十の気持ちを話し合う。	○ デジタル教科書によって本文を提示し、根拠となる叙述を示しながら自分の考えを発言していくようにする。発表は、ハンドサインを用いて児童による相互指名で進める。その際、立ちどませたい叙述では、教師からも問いかけたり、児童に聞き返したりして、全体の読みを深めていくようにする。	
	○ 「火なわじゅうをばたりと取り落とし」たときの兵十の表情を想像することで、ごんがくりや松たけを持って来てくれていたのに気づいてやれなくて撃ってしまった兵十の自責の念に気付くようにする。	
	○ 「青いけむりが、まだつつ口から…」の文に着目することで、兵十の深い後悔の気持ちがいっそう強調されていることに気付くことができるようにする。	
	○ 発表にあたっては、まず、伝えたい思いを周りの児童との間で発表し合うことによって考えを整理したり、自信をもって全体場で発表したりすることができるようにする。	
	○ 時間に余裕があれば、物語冒頭の「これは、わたしが小さいときに、村の茂平という…」という表現にも触れ、ごんと兵十との悲しい心の通い合いが村人によって語り継がれてきたことに気付くようにする。	
4 本時のまとめをする。	○ 兵十の立場に立って『兵十日記』を書き、それを発表することによってめあてに迫るようにする。	
	○ 一人一人の捉え方には違いがあると予想されるので、根拠を基に自分なりの読みができていればよいと考えたい。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 何ということだ。おれはくりや松たけを持って来てくれていたごんを火なわじゅうで撃ってしまった。でも、なぜ、ごんが持って来てくれていたんだ。ひょっとして、おっかあが死んでひとりぼっちになったおれをあわれに思って、ごんはくりや松たけを恵んでくれたんだろうか。それとも、こないだうなぎをぬすんだ償いをしていたんだろうか。もう少し早くごんの気持ちが分かっていたらこんな事にならなくて済んだのに。 </div>		
5 本時の学習を振り返る。	○ 本時の学習を振り返り、根拠を示しながら自分の考えを発表できた児童や、友達の発表を聞くことによって新たな発見のできた児童を称揚し、「読み方」の定着を図る。	
6 次時の学習を知る。	○ 次時は、同一作者の「手ぶくろを買いに」を読んで、「ごんぎつね」と似ているところや異なるところをさがしていくことを告げる。	
評 価	叙述を根拠にして、ごんを撃ってしまった兵十の気持ちを話し合うことによって、二人の心の通い合いを読み取ることができる。 （読むこと）	

